

それでは、**第一ヨハネ 4 章**です。**ヨハネの手紙第一**のテーマは、神を経験するというものです。神を味わうということです。神を人格的に、個人的に知るというものです。非常に分かりやすい単純なアウトラインももう一度振り返りたいと思います。**ヨハネの手紙第一の 1 章・2 章**に**神の光**について書かれていまして、その神の光を私たちは経験出来ます。神の光を私たちは味わうことが出来ます。**3 章・4 章**、今日見る**4 章**がそこに相当しますが、**神の愛**が強調されていて、私たちは神の愛を経験出来る、味わうことが出来るという内容となっています。最後の**5 章**の部分は、**神の命**です。これを私たちは体験出来るんです。死んでから体験するのではなくて、既にイエス・キリストを信じたその時点から神の命を、すなわち永遠の命を私たちは生き始めることが出来ます。それはただ不老不死の命というのではなくて、それは全く今までの命とは異なる、質の異なる、クオリティーの異なる命です。なぜならばそれは永遠の命だからです。永遠というのは、時間とは本来無縁のものであります。永遠というイメージは、長いと思うかもしれませんが、永遠の世界に時間はありません。時間の制約はないんです。始まりも終わりもないんです。ですから、永遠というのはこの世が経験するものとは全く異なる、クオリティーの全く違う命です。この命を生きることによって、これまでとは全く違う価値観、人生観、または死生観、世界観というものを持つことが出来ます。全く異なる力を得ます。全く異なる体験をすることが出来ます。そのアウトラインをもう一度思い出して頂いて、今日見るテキストは**4 章**ですので、繰り返しますと『**神の愛を経験する**』という内容であります。

この『**愛**』という言葉は、**ヨハネの手紙第一**のキーワードともなっていて、全部で 54 回も出て来ます。ですから、この手紙を書いた使徒ヨハネは『**愛の使徒**』と呼ばれるわけです。『**愛の使徒**』と呼ばれる所以は、まさにこの手紙で愛という言葉が 54 回も連発してヨハネが使っているところからも来ております。「互いに愛し合いなさい。」それが長老となったヨハネの口癖でした。常に講壇に上がれば、「互いに愛し合いなさい。」と、まるで子供たちに、孫たちに語りかけるようにヨハネは一言語ったということでもあります。

早速**1 節**から見て参りたいと思います。『**愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。**』愛する者たち、と呼びかけておりますが、霊だからといって、みな信じてはいけませんと。ちょうど**3 章 24 節**のところを見て欲しいと思います。霊について触れられております。『**24 神の命令を守る者は神のうちにおり、神もまたその人のうちにおられます。神が私たちのうちにおられるということは、神が私たちに与えてくださった御霊によって知るので。**』御霊によって、これは勿論、神の霊によって知るのでと。原語では“御霊”も、そして**4 章 1 節**の“**霊**”もギリシャ語は全く同じです。神の霊ということが文脈上分かる場合は、日本語では“**御霊**”と言っております。英語の聖書の場合はスピリッツ”Spirit”という言葉ですが、大文字で S を表記することで、それが神の霊であるということを読者に分かりやすくして表記しているわけです。“**御霊**”も“**霊**”もこれは原文では同じギリシャ語です。「**プニューマ**”pneuma”という言葉が使われております。神の霊もあれば、悪の霊すなわち悪霊・悪魔もあります。そして天使も霊的存在です。また人間も神のかたちに似せて造られておまして、人間にも霊が与えられております。いろいろな霊があります。ですから**霊だからといって、みな信じてはいけません**。何もかも全て神の霊、聖霊の働きだとは限らないということです。ですから時に、これは聖霊の働きだとか、これは聖霊の力だ、聖霊の導きだと言うような言葉を聞いても鵜呑みにしてはいけません。すべて試す、吟味する。それが成長した、成熟したクリスチャンのとるべき姿勢であります。パウロはベレアの人たちに「**ここにいる人たちはテサロニケにいる人たちよりも良い人たちだ。**」と言いました。何故良いのかというと、彼らは毎日聖書を熱心に調べて、そして果たしてその通りかどうか、本当かどうか、パウロのメッセージですら、新約聖書の大半を書いた偉大な使徒パウロの説教ですら彼らは旧約聖書と照らし合わせながら吟味したと言われております。それがクリスチャンとして良い人なんです。何でもかんでも鵜呑みにしてはいけません。有名

な牧師の言うことだから、世界でベストセラーになっている本が書いていることだから、だから私たちは信じます、ではなくて。すべて霊だからといって、みな信じてはいけませんので、吟味する必要があります。

第二コリント 11:4 も今参照して頂いて、これはパウロがコリントの教会に宛てた手紙ですけれども、使徒ヨハネがエペソの教会に宛てた手紙がヨハネの手紙第一であります。違う記者が違う教会に書いているんですけれども、同じような問題がそれぞれの教会にあるということがここからも窺い知れます。これは決して特異な問題ではない。非常に身近な問題で方々の教会に共通した問題として、もう既に 1 世紀の時代に見られたということです。『⁴というわけは、ある人が来て、私たちの宣べ伝えなかった別のイエスを宣べ伝えたり、あるいはあなたがたが、前に受けたことのない異なった霊を受けたり、受け入れたことのない異なった福音を受けたりするときも、あなたがたはみごとにこらえているからです。』別のイエスだとか、異なった霊、異なった福音といったものが、教会の中で語られていたわけです。コリントの教会においても。またエペソの教会においても。その他の教会においても、もう既に様々な異端的な教えが、非聖書的な教え、または神の霊でない霊が働いて悪さをしていたということ。人々を惑わし、滅びに向かわせていたということ。教会を分裂させていたということが、こうした箇所からも窺い知れます。これは何も 2000 年前の古い問題ではなくて、2000 年後の今日の教会にも同様の問題が発覚しているわけです。何でもかんでも信じてはいけません。鵜呑みにしてはいけません。必ずためしなさい。英語の聖書では、テストしなさい。吟味しなさいということです。私たちは何でも信じたくなります。ちょっとナイーブなところもあるかもしれません。未熟なクリスチャンであればあるほど何も考えずにそのまま聞いたら受け入れてしまう。勿論私たちは素直に従順になって聞き従うという必要があります。でもバランスを持ってすべて捉えなくてはなりません。時に蛇のように聴く、という姿勢も問われるわけです。鳩のように素直な面も持ち合わせて、そして同時に蛇のような聡さも私たちは持ち合わせなければなりません。バランスが必要であります。未熟なクリスチャンから成熟したクリスチャンへ私たちは移行していかなければなりません。その際には必ず騙されないようにテストする、吟味する。それが賢いクリスチャンのあり方です。

テーマは神の愛でありましたけれども、第一コリント 13 章 6 節に『(愛は、)不正を喜ばずに真理を喜びます。』という言葉があります。愛は、真理を喜ぶのです。愛は、何でも信じることではありません。確かに同じ第一コリント 13 章のところには『愛は、すべてを信じる。』とありますけれども、それは不正を信じるという意味ではなくて、人を信じるということ、神を信じるということです。真理は 1 つしかありません。ですから時に真理は人を分けてしまいます。その結果、傷つく場合もあるわけです。それでもなお愛は真理を喜びます。

エペソ 4:13~15 も参照して頂きたいと思います。ヨハネの手紙が宛てられたのもエペソの教会です。エペソ人への手紙というのはパウロという人がエペソ教会に宛てた手紙です。『¹³ ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって (成熟したクリスチャンになって)、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。(これが教会に集っている者の目標です。)¹⁴ それは、私たちがもはや、子どもではなくて (未熟なクリスチャンではなく)、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、¹⁵ むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。』愛はすべて何でもかんでも人の言うことを鵜呑みにするというものではありません。可哀想だから何でも信じてあげたい、という話ではなくて、偽りは信じてはいけません。また、「真理を伝えと、もしかしたらこの人は傷ついてしまうかもしれない。可哀想だから本当のことは言わないでおこう。」それも愛ではありません。愛は真理を喜び、愛は真理を伝えずにはられません。「あなたは肺癌です。」なんて言ったら傷ついてしまうかもしれない。だからこのことは伏せておこう、なんて言う医者も 1 人もいないと思います。特にその医者とはあなたは個人的な関係を持っていればこそです。その医者があなたの親友だったら、きっとあなたに真実を伝えてくれると思います。「あなたは肺癌です。」たとえ末期状態あっても、あなたは末期の肺癌であるということを愛していればこそ伝えるはずであります。傷つくのは可哀想だから、黙っておこう、伏せておこう。それは本当の愛ではありません。そして成熟すればするほど私たちは真理をますます喜び、真理をますます語るようになります。ただ何回も言いますように、そこにはバランスが必要であります。何でもかんでも正しいからといって真理を語りさえすれば良いというので

はなくて、愛をもって真理を語るということです。

テキストに戻って頂きたいと思いますが、私たちは神の愛を受けております。その神の愛は人間の愛とは勿論異なるわけです。神の愛は聖なる愛であります。1章で神は光であるということを見てきました。1章・2章のテーマでした。神は光ですと。神には暗いところが少しもないと。偽りがないということを見てきました。ですから、神の愛もまさに聖なる愛で、光り輝く愛で、そこには暗いところが少しもありません。嘘偽りがありません。神の愛は真理であります。神の愛と神の光、または神の聖さというものは、相反するようにイメージ的に捉えてしまうかもしれませんが、決して矛盾は致しません。確かに神が聖なる方であると、私たち罪人は容易には近づきません。容易どころか絶対に聖なる神に私たちはアプローチ出来ないんです。なぜならば私たちは自分を清めることも、自分の罪をすべて帳消しにすることも出来ないからです。でも神は同時に愛であります。それが今見ているヨハネの手紙第一 4章の重大なテーマです。神は愛であるために、神の方で私たちの方に近づいて来てくださる。神の方からアプローチして下さるのです。神がただの光であれば、私たちは絶対に暗闇の者ですから近づくことは出来ません。神の前には立ち得ないわけです。でも神が愛なので、神の方から逆に私たちに近づいて来て下さいます。そのような神の愛の最大の現れは、神が私たちと同じ人間の姿をとってこの世に来て下さったことです。

2節を見て下さい。『人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。』霊だからといって何でもそれは聖霊であるとか、神の霊であるというわけではありません。どうやってテストしたらいいのか。どうやって吟味したらいいのか。それが2節に書いてあります。3節もついでに読ませて頂きたいと思います。『イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです。』霊にもいろいろあってここには“反キリストの霊”という言葉が使われております。反キリストという言葉は前にも御紹介しました。“antichristos”アンチ・キリストという言葉です。“反”というのは単純に「反抗する、対抗する、反対する」という意味だけではなくて、そこには「取って代わる」という意味も含まれています。キリストに取って代わるような霊の働き。それも反キリストの霊であります。まるでキリストのような。本物っぽいですがけれども、実は偽者。羊の皮を被った狼のような者です。ですから騙されやすいわけです。見分けにくいという面があります。成熟したクリスチャンでなければ、未熟なままのナイーブで何でもかんでも鵜呑みにしてしまう、そういう若いクリスチャンは特に騙されやすいわけです。そういう人は教えの風に吹き回されたり、波にもたえそぼれたりしてしまう、そういう傾向があります。ですから皆私たちは御言葉によって、その真理によって聖め分かたれて、そして教えられていく必要があります。成長していく必要があります。その中で見分ける方法も勿論聖書から教えられていくわけです。今読んだちょうど2節3節のところ、どうやったらそれが神の霊であるのか、それとも反キリストの霊であるのか、一目瞭然に白黒ハッキリさせて判別出来るのかという方法が記されております。それは、人となって来たイエス・キリスト、受肉された言葉、受肉された神、それを信じるか信じないか、告白するかしないかというところで決められてきます。イエスを主と告白出来ない時は、必ず別の霊が働いていると思って下さい。イエスを主と告白出来ない時、必ず別の霊が働いています。第一コリント 12章 3節には、『聖霊によるのでなければ私たちはイエスを主と告白することはできない。』と書いてあります。ですから逆に言えば、イエスを主と告白出来ない時には必ず聖霊ではない別の霊が働いているということも、裏を返して私たちは知ることが出来ます。イエスを主と告白出来ない時には、必ず別の霊が働いています。告白するということは、別の言い方をしますと、心で信じて口で告白するということですから、信じるという言葉でもあります。聖書を学ぼうとしても、妨害するものは特別ありません。聖書を勉強しようとする人たちは大勢います。ノンクリスチャンの中にも大勢います。反キリスト的な人たちの中にも聖書を学びたいという人はいっぱいいます。学んでいる人も実際におります。研究している人たちも大勢おります。でも、イエス・キリスト信じようという段階になりますとそこには妨害する霊が働きます。聖書を学ぼうとする時には別段何のトラブルもありません。でも、イエスを信じようとする時にはいろいろなトラブルが起こります。いろいろな障害が生じてきます。妨げるものがあります。そのような霊の働きが私たちの背後に見られるということも覚えたいと思います。霊は様々であります。聖霊もあれば、ここで言われている反キリストの霊

もあります。イエス・キリストを告白する霊というものは、ここでは特に人となって来たイエス・キリスト。そしてこれまでもイエスが神の御子であるということは見えてきましたが、**4章15節**のところを見て頂くと『**だれでも、イエスを神の御子と告白するなら**』と。イエスが、人となられた神であるということです。イエスの人性とイエスの神性、その両方を私たちは信じているわけです。どちらか一方ではありません。両方共です。ですから、イエスは神であるけれども人ではない、と言うのは反キリストの霊です。または、イエスは人であるけれども神ではない、と言うのも反キリストの霊であります。神の霊というのは、イエスが100%人間であり100%神であるということ信じ、口で告白するものであります。イエス・キリストの神性と人性、両方とも認めるものが聖霊によって立っている者たちであります。どちらか一方、片方を否定する、両方もそうですけれども、否定する者は皆、反キリストの霊によって立っている者たちであります。

ヨハネの時代はグノーシス主義という異端がもう既にはびこっておりまして。グノーシス主義、前にも説明しましたがけれども、グノーシスというのはギリシャ語から来ております。「ナスティック」Gnostic と英語で言いますが、意味は「知識」であります。または「認識」という言葉から来ています。そのグノーシス主義という教えは、二元論というもので表現されます。それは物質と霊という二元です。世界は物質と霊から成り立っている。そして両者は相反するものである。霊は良いもの、善です。物質は、肉体は、すべて悪いもの。善悪という二元論です。何でもかんでも目に見えるもの、肉体も含めてそれらはすべて悪いもので、目に見えない霊の世界こそが良いもので、それが救いであるということです。そのような救いは、グノーシス、すなわち特別な知識「英知」によって得るのだというのが、グノーシス主義の救いでありまして。物質は悪いものですから、その物質から離れて霊的世界に帰ること。仏教で言うところの「悟りを開く」ということです。ですから、実は仏教もグノーシス主義とそっくりなわけ。その本質の部分は似ているわけです。そして様々なカルト、新興宗教もこうしたグノーシス主義に影響を受けているわけですが、このグノーシス主義のもたらすライフスタイルというのは、二極化されます。まったく二つの対照的なものに分かれます。霊が良いもの、物質が悪いものという考えを追求していきますと、二つの大局的なライフスタイルが生じてきます。一つは禁欲主義です。すべて肉は悪いものですから、肉を叩いて、打って、鞭打って、修行して、苦行して、そして霊の世界に至る。悟りを得る。そうした宗教は沢山今でも見られます。肉を断つことによって霊の世界に、すなわち救いに至るということです。もう一つは放縦主義です。または無律法主義とも言います。放縦というのは、欲しいままに振る舞う、やりたい放題ということです。禁欲主義とは全く正反対のもので。肉は悪いものです。ですから肉において成すことはもうすべて悪いことであるので、霊の世界には何ら関係がない、全く関わりがないというふうな理解をして、肉において成すことは別段気に留めることもない。それは霊の世界に何の影響も与えないんだと。隔離されている両者はまったく入り乱れることはないので、肉において何をしたら許されるんだと。霊において悪いことをしなければ、それで良いという考えです。ですから、霊に影響を与えないという勝手な解釈をして、そして肉においてふしだらな、不道德な生活を奨励するわけです。その二つの生き方、禁欲主義と放縦主義にグノーシス主義はそのような二つの生き方をもたらしていくわけです。

それがキリスト教に入りますと、イエスは人となってこの世に来られたということなので、グノーシス主義によると人になるということは肉を取るということです。物質をまとうということですから、それは悪いということになります。もしイエスが肉をとって来られたのであれば、人間となったのであれば、神が人となったということ。それはグノーシス主義では、とても受け入れ難いことになります。ですから、グノーシス主義でイエスの存在を捉えようと、それは人間の目にはまるでイエスは人の姿をとって生まれて、活動して、死んで、復活したように見えるけれども、実際にはイエスはまるで幽霊のようにして地上生活を送られたのであると。それは幻影のようなものだったというふうに主張します。それがのちに仮現説というような教えとなって、またキリスト教界の中に蔓延していきます。これも勿論グノーシス主義から出ております。イエスは本当に文字通り肉を取ったわけではない。まるで肉を取ったように見えたのだ。ドケティズムとも言います。それは「~のように見える」というギリシャ語から来ております。まるでイエスが人間のようにして生まれて、生活して、死んで、復活したように見えたんだと。それは人間の目にはそう見えたんだ。それがグノーシス主義のイエス像であります。あくまでイエスは神ですから、霊的存在でなければいけないわけです。肉はすべて悪いわけ

ですから、イエスがもし肉をとったとなると、イエスは神ではなくなってしまうわけです。それが当時のキリスト教グノーシス主義の考え方でありました。そんな彼らを意識して、**人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものであると**。もし神の受肉を否定するならば、それは反キリストの霊である。グノーシス主義者を名指しにしてヨハネは非難したわけです。あなたがたの考えは、教えは、非聖書的であって、悪霊によるものだというをここでハッキリと述べたわけです、言明したわけです。

もし、イエスがただの幻影(仮現というものです)に過ぎないということになりますと、イエスは人間とはかけ離れた存在、全く遠い存在、私たちには全く知りえないような、そんな存在で人間に同情することも出来ない、そういう冷たいイメージを抱いてしまいます。でも、人となって来たイエス・キリストを告白する者たちは、イエスが私たちと同じように地上を歩まれ、私たちと同じようにあらゆる試みを受けてなお罪を犯さなかった。そんなイエスは私たちの気持ちを誰よりも理解して、そして弱い私たちを助けて下さるお方。私たちに同情出来る大祭司であるというふうには私たちがイエスを身近な存在として、憐れみ深い大祭司として受け止めるわけです。その一方でグノーシス主義者は、そんな事はあり得ないことであると。すべて物質は、すべて肉体は悪いものですから、神はただ霊的な存在、幽霊のような存在で、人間とは全くかけ離れた存在、全く冷たい存在、全く隔絶されてしまったかけ離れた存在であると教えるわけです。温か味がないもの。そして私たちが罪を犯せば、イエスはもう本当に私たち人間に失望して、がっかりして背を向けてしまうような神であると。そんなふうにはグノーシス主義は教えたわけです。私たちの多くも場合によっては勝手なイメージを持って、イエス・キリストとはこういう神である。聖書の神とはこういう神であると。人間的に勝手な神観を抱いてしまう。そしてそのような神は信じ難いとしてしまう。そういう傾向はすべての人に見られると思います。特に聖書を読まない人に限って、勝手にキリスト教の神はこういうものだと決め込んで、そういう神は信じ難いとか、信じられないとか、信じたくないと平気で言うわけですが、よくよく話を聞いてみれば、「私もあなたが信じたくない神は、私も信じたくありません。だって聖書にはそんな神について書かれていないからです。」というふうに答えるようになります。いずれにしてもグノーシス主義というのは、聖書を読ませないで自分たちが悪霊から受けたグノーシスという特別な啓示、英知、知識、それによって救われるんだというようなことを説いたわけです。聖書だけでは不十分です。聖書も使いますけれども、聖書プラスアルファです。そして特別な知識がなければ本当の神を知り、本当の救いに与ることも出来ないというようなことを主張するわけです。そして結末としては、禁欲主義に走るのか、律法主義に走るのか。それともまた真逆の放縦主義、無律法主義に走るのか。どちらかのライフスタイルに導きます。それによって私たちは知ります。「あっ、この人は今反キリストの霊に惑わされているに違いない。」その結果を見れば、そのライフスタイルを見れば分かります。そのようにして私たちは、神の霊か、それとも反キリストの霊であるのか見分けることが出来ます。

ヨハネの時代は今から2000年前ですから、古代の時代と言って良いと思います。イエスが神であるということについて当時のクリスチャンたち、当時の世界では、特別異論もありませんでした。キリスト教会においてイエスが神であるということを議論する人たちは当時はいませんでした。でも逆にイエスが人間となった、神の子が人の姿をとってイエスとしてお生まれになった。私たちと同じように地上を歩まれた。そして文字通り十字架にかかって死んで肉体を持って復活されたということについては、様々な議論が飛び交っていたわけです。でも、現代はそれとは全く正反対です。「否、イエスは神ではない。イエスは歴史上の人物であった。キリスト教の開祖であった。」仏教の開祖の釈尊と同じように、イスラム教の開祖のムハンマドと同じように、イエスはただの人間であって神ではないと。人間であることは認めても、神であることは否定する。それが現代あります。興味深いですが、古代においてはイエスが神である事は誰も疑いませんでした。でも、人間であったということは疑ったんです。でも、現代はイエスが人間である事は、皆大体一般知識として、教養として信じられておりますけれども、でも、イエスが神であるという話はやはり否定されるわけです。それはあり得ないと。懐疑的な人たちは、疑い深い人たちは、325年にニケイアというところ、ニカイアとも言います。そこで教会の第一回の公会議というものが開かれました。ニカイア公会議、ニケイア公会議とも言います。世界史できっと皆さん習っているはずなんですけども、忘れてしまっているかもしれませんが、ニケイア公

会議というものがあつたんです。疑い深い人たちはその会議において、325 年の話ですが、その会議においてイエスが神であるということが初めて公に、教会の共通の教理として成立したと。それまでは、イエスが神ではなかったけれども、325 年のニカイヤ公会議、ニカイヤ公会議によってイエスが神と認定された。またはイエスが神に仕立て上げられた、祀り上げられたと、疑い深い人たちは理解します。でもそれは全くの間違いです、誤解です。先程も言いましたように、325 年以前の古代の時代、既に 1 世紀の時代に、イエスが神であることを疑うものは誰もいませんでした。勿論誰もという語弊があるかもしれませんが、ほとんどそんな人はいなかったわけです。逆だったんです。イエスが人間であつたということについては、もうグノーシス主義が蔓延していて、それを否定するよう教えがはびこっていたわけです。ですから 325 年のニカイヤ公会議によって、初めてイエスが神とみなされた、神に仕立て上げられた、祀り上げられたという議論は全くの誤解で、全くのこじつけで、間違いであります。そこでどういうことが起こっていたかと言いますと、当時の教会にアリウス派という異端が既に存在していたわけです。これは世界史でも習ったところだと思います。アリウス派という異端を脅威と教会は受け止めていたので、何とかこの教えを阻止しなければいけない。これが教会の中に蔓延するのを阻止しなければいけない、ということでそのアリウス派を公の場で否定するというそういう議決をしたわけです。じゃあ、そのアリウス派の異端的な教えとはどういうものかということ、神は唯一であつて、イエスは天地創造前には存在しなかつたと。父なる神は初めも無いお方。でも子なる神イエスは、天地創造以降に造られた存在であるという理解です。でも聖書によれば、父も子も聖霊も皆神であつて、天地創造前から存在し、イエス・キリストもまたすべてを造られた創造者であるわけです。でもアリウス派は「否、そうではない。神は唯一であつて父なる神がすべてを造つたんだ。イエスは天地創造以降に造られたものである。」どこかで聞いたような話だと思います。それは現代のエホバの証人、現代のモルモン教、現代の統一協会といったカルト、キリスト教系の異端とそっくりそのままの教えであります。そのような教えがもう既に 4 世紀 325 年の段階で教会の中に蔓延しようとしていたので、皆さんで世界中から学者たちが集まって「聖書にはそうは書いていないんだ。キリストは人の姿をとつてこの世に来られた受肉された言葉、神である。」と。イエスは天地創造前から存在しておられたお方、創造者であるということでアリウス派のその間違つた異端的な教えを公の場で否定して、改めて三位一体の神の神学というものを確認したわけです。イエスがそこで神に仕立て上げられたのではないです。ちょっと興味のない話かもしれませんが、でも疑い深い人たちは必ずと言って良いほどこの 325 年のニカイヤ公会議を持ち出してきました。「否、イエスはこの時に 4 世紀になって初めて神に見なされただけであつて、最初から神ではなかつたんだ。クリスチャンたちが勝手にイエスを神に仕立て上げて、そして作り上げた宗教である。」と言うような全く歴史認識がない、ただ疑い深い人たちが決まり文句のようにして使う会議ですので、その辺を皆さんはちゃんと踏まえて正しく認識して頂きたいと思います。ですから、古代キリスト教界においてイエスが神であることには別段異論はなかつたんです。でもグノーシス主義によって、イエスが人間であつたということには様々な反対説が生じまして、その動きに対してヨハネはこの手紙を書いたわけです。他にもパウロはやはりグノーシス主義に対して脅威を感じていまして、パウロも同じような警告を促しています。パウロがエペソの若い牧師であるテモテに宛てた手紙にも“グノーシス”という言葉が出てきます。**第一テモテ 6:20~21**。そこには「**靈知**」という言葉が使われています。「**靈知**」それが原語では“グノーシス”であります。テモテはエペソの教会の牧師でした。ですから、「**靈知**」には気を付けなさいと。グノーシス主義には気を付けなさいと。それは、イエスが人間ではなかつたということを教えていたわけです。ただの幻影だった。ただの仮現であつた。ただの幽霊のような存在だったという教えです。人間とは全く関わりが持てない、同情もし得ない、全く隔離されたかけ離れた存在であるというようなイエス像を植え付けていたわけです。異なつたイエスを教えていたんです。異なつた靈によって教えていたわけです。異なつた福音です。

でも、それと同じように異端的なのが、イエスがただの人間であつて神ではないという考えです。常に私たちはイエスの神性と人性、両方を信じる者として、クリスチャンはこの両方を真理として、矛盾するようではすけれども真理として聖書に書かれている以上額面通り受け止めるわけです。100%神であり 100%人間である。理性ではとても受け入れ難いものですが、聖書にそう書いてあるわけです。三位一体という考えもそうです。理性ではとても受け

入れ難いものです。3人神がいるようで、でも実はお一人である。三位にして一体であるという。1+1+1=3じゃないですかとなるんですけども、そうではなくて1×1×1=1というような捉え方です。いずれにしても反キリストの霊は、イエスの神性を否定するか、または人性を否定するという者たちであります。特に現代は、イエスが人間であることは多くの一般人には受け入れられていますけれども、イエスが神であるということは受け入れ難いこととして退けられているわけです。その結果、キリスト教系の異端も今流行っているわけです。エホバの証人、イエスは神ではない。イエスは神に造られたもの。大天使ミカエルである。モルモン教では、イエスは神ではない。同じように神に造られた御使いでルシファーのお兄さんの御使いである。ルシファーというのが後に墮落したサタンです。統一協会では、否イエスはただの人間である。バプテスマのヨハネのお父さんのザカリヤと処女マリヤが不倫して生まれた子供がイエスである。とんでもないイエス像です。また、田川建三なんていう人も日本では大変よく知られた神学者、聖書学者というような人でありましてけれども、イエスがただの人間であって神ではない。イエス後で神に仕立て上げられたんだなんていうことを、まことしやかにまるで専門家が何もかも知っているかのように語っていますけれども、でっち上げであります。それは反キリストの霊によるものです。全てそれらが異端、カルトの共通点です。イエス・キリストの神性を否定する、または人性を否定する。それがすべてのカルト、すべての異教の特徴です。それはグノーシス主義の特徴でもあります。イスラム教もそうです。イエスは預言者として、人間としては認めますが、神ではないと。ですから、キリスト教系の異端に限定した話ではありません。すべての異教は、偽りの教えは、イエスが神ではない、イエスが人ではない。それによって見分けることが出来ます。ですからそんなに難しいのではない。難しい複雑怪奇な作業は必要ありません。イエスが神であり、イエスが人である。それを信じる者は聖霊によって、そのイエスを主と告白することが出来るようにされました。頭で私たちは、理性でそのことを調和をして理解できたから信じたのではありません。聖霊が働いて下さったので、理解し難いことでも、理性を超えたことでも、私たちは額面通り信じる事が出来るようにされたわけです。グノーシス主義はそのような聖霊の働きを否定して「否、イエスを信じてそれで良いなんて、そんな都合のいい話はない。そんな簡単な話ではない。もっと深遠な知識が必要なんだ。イエスを信じるだけでは不十分である。聖書だけでは不十分である。プラスアルファの特別な知識、啓示が必要である。そうでなければ本当の神を知ることは出来ないし、本当の救いに与ることは出来ない。私たちと一緒に聖書を学んでみませんか。」ピンポンとしてくるわけです。そして「この小冊子を読んで下さい。」という話になるわけです。全部グノーシス主義であります。「特別な儀式が必要です。聖なる下着を身につけなければいけません。」モルモン教はそう教えます。聖なるパンツを履かなければいけないんです。「いろいろな儀式が必要です。モルモン教徒同士結婚しなければ、あなたは救われません。」いろいろな教えが「聖書だけでは不十分。イエスをただ主と信じるだけでは不十分。」と言う話であります。合同結婚式をしなければいけませんとか、もうそういうものはすべて反キリストの霊であります。

4節の方に目を移して頂きたいと思います。第一ヨハネ4:4『子どもたちよ。あなたがたは神から出た者です。そして彼らに勝ったのです。(彼らというのは勿論、その反キリストの霊によって動かされている人たちです。またその背後で働いている悪の力、悪霊、悪魔です。彼らに勝ったのです。)あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。』あなたがたのうちにおられる方、勿論これは聖霊なる神、またはキリストの御霊です。内住のキリストであります。「あの者より」というその「あの者」というのは、この世の支配者、この世の神とも呼ばれている悪魔、サタンのことです。私たちの内には聖霊が宿っています。キリストの御霊が住んで、私たちはキリストが内におられるということを体感出来ます。それによって私たちは打ち勝つことが出来ます。それによって私たちは見分けることが出来ます。それによって私たちは勝利した生活を送ることが出来ます。たとえで言いますと私たちは深海魚のような存在です。深海魚というのは不思議なもので、どうしてあんな深海で、水圧が物凄い所で、物凄いプレッシャーがあるとスイスイ何のプレッシャーも感じずに泳いでいられるのか、生活出来るのかと不思議に思うかもしれませんがけれども、例えば空っぽのペットボトルをある程度沈めていけば当然水圧がかかってくるわけです。そのうちにつぶれてしまう。容易に想像出来ると思います。でもそのペットボトルに液体をいっぱいにして水に沈めると、そうたやすくはつぶれないわけです。深海魚も同じ仕組みです。深海魚の皮がまるで潜水艦のように分厚

い鉄板でできているのではありません。むしろぶよぶよしているわけです。アンコウを思い出して下さい。ぶよぶよしているあのような薄い皮でもなぜ生きていけるのかと言いますと、中が液体で、特に脂身でいっぱいだからです。ワックスのようなもの、それが浮子袋になっています。それが空気だったならば、勿論深海でも深海魚はつぶれてしまいますが、その中は油のような液体で満ち満ちていますので、プレッシャーがかかっても大丈夫なんです。それに私たちクリスチャンは似ているんです。この世からいろんなプレッシャーを受けます。でも私たちは内にイエス・キリストがおられるので、このような罪の世界でも罪に屈服することなく、誘惑に負けてばかりいないで勝利して歩むことが出来るんです。確かに私たちは弱いです。深海魚の皮を見れば分かります。ぶよぶよしています。薄っぺらいです。とても潜水艦のような分厚い鉄板ではありません。でも私たちの内には強いお方が住んでいるんです。満ち満ちているんです。この御霊によって、この内住のキリストによって私たちはこの世にあっても勝利するんです。そのことを覚えて欲しいと思います。私たちがもし、この世に勝利しよう、あの者に打ち勝とう、と思って自分の外側を強めようとするならば、鉄の鎧で、鉄壁で自分を固めようとするならば、必ずつぶされます。私たちの作り上げるものではとても立ち向かうことは出来ません。でも弱くてもあなたの内にあるあの者よりも強い方が住んでくださって満ち満ちて下さるならば、あなたはどんなプレッシャーにも、どんな攻撃にも耐えることが出来ます。打ち勝つことが出来ます。ですから私たちにはそのような内なる方がおられるということを信じて欲しいと思います。その者は神から出た者です。深海魚のようではなくて、潜水艦のような人たち。彼らは肉なるものです。霊的な存在ではありません。自分たちの力で何とかプレッシャーに打ち勝とうと身を固めようとする人たち。ですからそのようにして本物のクリスチャンか、そうでない者かを見分けることが出来ます。「あのノンクリスチャンの方がよっぽど立派に見えます。よっぽど強そうです。まるで潜水艦のように見えます。」注意して下さい。必ずしも強いわけではないです。「あの人はまるで深海魚のように弱々しい。見た目もちょっと似ているかもしれない。醜い。でも、あの者の内には、あの人の内には、物凄い力が働いている。あんなに弱いのに、どうしてこんなに強いられるのか。こんなに辛いことがあったのに、どうしてあんなに平安な状態でニコニコしていられるのか。不思議だな。分からない。」どうして深海魚があんなに悠々と真っ暗闇を泳いでいるのか、とても分からないように、この世にあっても弱々しい人たちがスイスイ泳ぐように、元気よく泳ぐように歩んでいる姿を見て、世の中の人たちは首を傾げるわけです。でもその秘訣は、イエス・キリストを信じて、そのお方がその者の内に住んで下さるということで証明されるわけです。

5 節を見て下さい。『**彼らはこの世の者です。ですから、この世のことは語り、この世もまた彼らの言うことに耳を傾けます。**』反キリストの霊は、キリストっぽい良いことも言うわけです。反キリストというのは、キリストに取って代わるということですから、とても正しいように見える。とても素晴らしいように思える。そういう教えを説くわけです。それは非常にこの世ウケするわけです。人気を博するわけです。それは具体的に言いますと例えば心理学的なアプローチをもってキリスト教の福音を混ぜものをする事で多くの一般の方にも受け入れやすいようにしてしまう。そのように、耳障りがあり気になってしまいますと拒否されてしまいますので、耳に心地が良いような教えを説くようになります。多くの人に受け入れてもらうように福音を薄めていくわけです。混ぜものをしていくわけです。

第二テモテ 4:3~4 に、これもエペソの牧師テモテに宛てられた手紙ですから、ヨハネの手紙と共通点があるわけですが『³ というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず (健全な教えと言うのは聖書的な教えです。)、自分につごうの良いことを言うってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、⁴ 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。』彼らはこの世のものですから、この世のことは語り、この世もまた彼らの言うことに耳を傾けます。「イエスは神なんかじゃない。ただの人です。」とか、または「イエス神であって人間の姿はとられていない。霊的な存在である。」イエスの神性も人性も両方とも受け入れるのは、人間の理性にとっては抵抗があるわけです。理解し難くて、すべての人にスムーズに受け入れられるものではありません。ですから多くの人にたやすく受け入れられるように、分かりやすいというふうな名目を付けて、大義名分を付けて、聖書の真理を歪めてしまうわけです。福音に混ぜものをしてしまうわけです。真理を薄めてしまうわけです。要注意です。

私たちは、何が正しくて何が間違っているのか。何が真理で何が偽りなのか、簡単に見分けることができます。第一ヨハネ4:6節を見て下さい。『**私たちは神から出た者です。神を知っている者は、私たちの言うことに耳を傾け**(私たちの言うことというのは、勿論使徒ヨハネたちが言うことです。使徒ヨハネたちというのは、勿論新約聖書を書いた人たちですから、言い換えれば聖書のみことばに耳を傾けというふうにも理解出来ます。)、**神から出ていない者は、私たちの言うことに(すなわち聖書の言葉に)耳を貸しません。私たちはこれで真理の霊と偽りの霊とを見分け**ます。』分かりやすいですね。これもひとつの見分け方です。「真理の霊と偽りの霊。境目が難しい。どうやって吟味して、試して、見極めたらいいのか。」単純なことです。聖書のみことばに耳を傾けるならば、それは真理の霊によって導かれております。聖霊が聖書を書きました。聖霊は「**真理の御霊**」とも呼ばれています。ですから聖霊は聖書と矛盾はしません。でも、聖書の言葉に耳を傾けない者たちは、口では「これは神の霊の働きだ。聖霊の導きだ。」とか言いますが、実際に聖書の言葉に耳を傾けない。聖書の言葉から外れていくということになりますと、それは偽りであると言うことです。私たちは内に聖霊も頂いていますし、私たちの心の中に聖霊が住んで下さるだけではなくて、その聖霊は私たちに書かれた言葉、聖書も与えて下さいました。心には聖霊があり、手には聖書があるわけです。私たちにすべてが揃っています。これで私たちは、真理と偽りを容易に見分けることができます。神から出た者であれば、聖霊が必ず語って下さいますので、心の中で既に何が正しいのか教えられているわけです。例えば本当に救われているクリスチャンであれば、銀行強盗をしようか迷うことはありません。極端な例かもしれませんが、心の中でもう既にそれが間違い、罪である、勿論犯罪ですけれども、分かっているわけです。それはちょっと極端な例であったかもしれませんが、でももう少し微妙な例として、犯罪になるかならないかという話としまして、「私は妻と離婚すべきかどうか。夫と離婚すべきかどうか。」クリスチャンならば分かっています。答えは、離婚すべきではないということです。別に離婚することは犯罪ではありません。でも聖書ではハッキリ「神は離婚を憎む。」と言われています。勿論離婚が容認されるということも聖書は言っておりますけれども、でも大原則としてクリスチャンは離婚をすべきかどうか迷うものではありません。既に心の中に、心の板に神の御心が書きつけられているわけです。これが新しい契約、**エレミヤ 30 章**に書かれている新しい契約、新約であります。心の中にもう分かっているんです。何が正しいことなのか、クリスチャンはもう分かっているんです。むしろ正しいことが分かっているのに、正しいことを行なわないという弱さを私たちは抱えてしまっている残念な面もありますけれども、でも素晴らしい点として、既に心の中でもう分かっているんです。クリスチャンは心の中で分かっていることを行うことができます。ノンクリスチャンは分からないんです。例えば、離婚すべきかどうか迷うんです。ノンクリスチャンはアダルトビデオを見るかどうか迷うんです。犯罪ではないですね。ポルノを見るかどうか。クリスチャンは迷う必要はありません。もう分かっているんです。ですから私たちは神から出た者として内なる声をしっかりと聞き分けることができます。イエスが私たちの羊飼いですから、羊は羊飼いの声を聞き分けます。イエスが私たちに語っておられることをちゃんとキャッチ出来るんです。イエスが言われた通りのことを私たちは行うということが出来る者となっています。ですから私たちはすぐに誰かに電話をかけなくてもいいんです。「あー困った、あの専門家に。カウンセリングを頼もう。」そういうことにはならないんです。クリスチャンはすぐに、イエスが何とおっしゃっているのか、聖書が何とこのことについて語っているのか、内なる声にもしっかりと耳を傾けることができますので、そうしたものは要らないんです。不要なんです。勿論聖霊はすべてのクリスチャンのうちに住まれていますから、別のクリスチャンから真理を告げられることもあると思います。聖霊は牧師のうちに働いて、牧師が御言葉を説く時に、その時に知るべきことを、聞くべきことを聞かされる。何が正しいのかハッキリ示される。またはそれを確認するように、迷っていた時にはそれが確かであるということを確認するようなことも神が他の兄弟姉妹を使って示されるというケースもあると思います。でも、私たちはそれ以外のことで迷ったり、それ以外の手法・方法を持って常に誰かに依存しなければいけないとか、誰かに相談してカウンセリングを頼まなければいけないということは必要ありません。迷うことはありません。主人と離婚すべきかどうか、悩む必要はありません。既にあなたが知っていること、それが真理である、正しい、素晴らしい、神に喜ばれるということが分かっていることをあなたはただ行うだけでいいんです。後は、結果は主が必ず良きに働いて下さいます。

その続きです。7 節以降です。少しギアチェンジします。これまでは、神から出た者は神のことば、聖書に耳を傾ける。神から出ていない者は、ノンクリスチャンは神のことばに耳を傾けない。ですから聖書を、御言葉を分かち合っても全然聞く耳を持ちません。「聖書はそう言っているかもしれないけれども、それはあなたの解釈だ。」とか、特別聖書を重んじることは致しません。聖書を基準としないんです。自分の考えばかりを前面に押し出します。「あなたは聖書の言葉ばかり引用して。」とか、聖書の言葉にそれほど重きを置かない、重要視しないわけですけれども、それが反キリストの霊によって惑わされている人たちの 1 つの特徴、偽りの霊に駆られている人たちの特徴でありましたが、7 節以降はちょっとギアがチェンジします。勿論テーマは神の愛であることには変わりはありません。このヨハネの手紙の中では、神は光であるということが 1 章で言われていました。そして 2 章です。そして 3 章 4 章では、神が愛であるということが言われていました。これらは先程も言いましたように、相反する概念ではありません。

ヘブル 12:29 によると『神は燃え尽くす炎』というふうな描写がなされています。神は光、神は愛、または神は炎、火であると。燃え尽くす火であると。いろいろな神のイメージを持たれると思いますが、でもこれらはすべてその神との関係によってガラッと変わってきます。例えば、神が燃え尽くす火であると。あなたと火との関係。例えばこの冬であれば、多くの皆さんは暖炉を持っています。暖炉の火というのは非常に温かい物、また美しい物、つつい暖炉の前でぼんやり火を眺めながら時間が過ぎてしまうということがよくあると思います。私も暖炉が大好きで、何時間でも火を見ていられます。でも暖炉の中の火ではそのように暖かく非常に役に立つ物、美しい物に映りますけれども、その火が家に燃え移ったらどうでしょうか。火事になってしまったらどうでしょうか。「ああ美しいなあ、暖かいなあ。」と言って悠長に見ている場合ではないですね。それは恐ろしいものです。それは避けたくなるものです、当然ですけれども。ですから火との関係によって全く同じものでも、捉え方が異なるわけです。ある者にとってそれは暖かい光と映るかもしれませんが。でも、ある者にとってはそれは凄まじい恐ろしい炎であると。すべてを燃え尽くしてしまう怖いものだと。そのことも今 7 節以降を読む前に考えて頂きたいこととして皆さんに念頭において頂きたいことです。イエス・キリストを信じるならば、あなたは永遠の命を持ちます。イエス・キリストを信じないならば、あなたには神の怒りが留まるのです。ヨハネの福音書 3 章 36 節の言葉です。イエスを信じるならばその火はまるであなたを暖かく包み込む美しい暖炉の火であります。でもイエスを信じないならば、それはあなたのすべてを燃え尽くす恐ろしい怒りの炎であります。イエスを信じる者と信じない者の違いがあります。

『⁷愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。⁸愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。』愛がない者には神が分からないと。火との関係の違いが、同じ火でも全く違ったリアクション、全く違った概念をもたらすということを先程お話しました。神は愛なんです。信じる者には、まさに神はすべてを暖かく包み込むような存在となります。でも信じない者には、神は愛なんですけれどもその者にとって神の愛はあくまで聖なるきよい光り輝く愛ですから、恐怖に思ってしまうわけです。暗闇の者にとって光は脅威でしかありません。氷のような心を持つ者にとって火は自分を溶かしてしまう、自分の存在をすべて消してしまう恐ろしいものにしか映らないわけです。愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。

そして 9 節 10 節もお読みします。『⁹神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。¹⁰ 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちに愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。』ヨハネの 3 章 16 節も思い出させる箇所です。同じヨハネが書いたわけですから当然福音書に書かれている言葉と非常に似通っている言葉があっても不思議ではありません。神はひとり子を私たちに与えて下さったんです。神が私たちと同じ人の姿をとったんです。言葉は人となって私たちの間に住まわれたんです。神は実にそのひとり子をお与えになったほどに世を愛されたんです。それは御子を信じる者が 1 人として滅びることなく永遠の命を持つためであります。この御子はなだめの供え物となって下さいました。なだめの供え物というのは、罪に対する神の怒りをなだめる供え物です。神が要求するものをすべて満たす存在となって下さった。聖なる神は、罪を受け入れられません。でもすべての罪

が然るべき方法で処理されたのであれば、すなわち罪から来る報酬は死ですから、そのために何をなすべきかという、罪のない命を持って罪を贖う必要があります。それによって神の正義は全うされるわけです。イエスは罪の無い方としてなだめの供え物になって下さいました。罪は人の命を奪うものです。死をもたらすものです。そのためには罪のない命を持って贖う必要があります。神は死ぬことが出来ない存在ですから、私たちと同じ人間になりました。人間の命を贖うのは人間の命ですから、イエスは人間の姿をとって下さったわけです。人として生き、人として死んで下さったわけです。神は死ぬことは出来ないわけですから、人間にならない限りは人間の罪を贖うことは出来ません。それによって神の怒りはなだめられ、それによって神は全て要求が、義なる要求はイエスの十字架の死によって満たされて、そして代わりに私たち罪人はすべての罪を赦される。永遠の滅びから救われ、永遠の命を得ることが実現したわけです。それほどまでに私たちは愛されております。誰も神を求めた者はいないと、**ローマ3章**にあります。私たちが神を求めたわけではありません。神が私たちが求めて失われた羊を、失われた罪人を探して下さったわけです。神は愛ですから、神の方から罪人の私たちのところに近づいて下さいました。神が光で聖なる方だったならば、私たちは自分の方からは絶対に神にアプローチは出来ないわけです。それは不可能です。でも、神は愛だから私たちに近づいて来て下さいました。その神の愛を私たちはイエス・キリストの十字架の贖いの死をもってハッキリと認めることが出来ます。十字架の足元に行くことによって、本当にこの私がどれだけ神に愛されているのか、そこで確認出来ます。それが聖餐式というものです。聖餐式はイエス・キリストがパンを裂き、そして杯を持って、「これをイエス・キリストが私たちのためになして下さったことの記念として行いなさい。わたしを覚えてこれを行いなさい。」とイエスは聖餐式を制定されました。それが、クリスチャンが毎回毎回神の愛を確認するために記念して祝う聖餐式です。それがディナーです。夫婦であれば外に出て一緒に特別な日に外食をする、ディナーを一緒に楽しむ。そういう時に夫が妻を誘って、そして素敵なレストランか何かでディナーを共にする。その時に妻の方では夫の愛をもう一度確認出来ます。愛されていることは分かっている、そのようなディナーの席を設けてもらって、そして自分を本当に特別な者として受け入れて、そして自分との時間を大切に楽しんでくれる。そんな夫を見て、本当に自分は、妻は愛されているんだというふうに思えるわけです。そのようにしてイエス・キリストも私たち花嫁をディナーに誘ってくれます、招いてくれます。それが聖餐式です。**私を覚えてこれを行いなさい**。聖餐式を通して、このディナーを通して私たちは、本当に私たちは愛されているということを確認出来ます。パンと杯を口にすることによって。毎回毎回夫婦が特別な日にディナーを一緒に楽しむように、その時にお互いの愛を確かめ合うようにして「本当にイエスは私たち、あなたのことを愛しているよ。」ということを聖餐式のうちに私たちは五感をもって味わうことが出来るわけです。

ローマ 5:8 にもこう書いてあります。『**私たちがまだ罪人であったとき**(言い換えれば、私たちが最低最悪の時。その時にもう既にキリストは)、**私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。**』私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられますと。クリスチャンになってから私たちは神の愛を受け始めたのではありません。クリスチャンになる前、最低最悪の時に既に神はあなたのためにひとり子を与えるほどに愛しておられたのです。あなたが最もおぞましい罪を犯していた時、あなたが完全に神に背を向けていたその時、実は神はあなたのことをすべてをもって愛しておられたのです。全身全霊をもって神はあなたを文字通り愛しておられました。キリストを、ひとり子を与えるほどにあなたを愛しておられたわけです。であるならば、今あなたが神から愛されていないということは全くあり得ない話です。最低最悪の時に既にひとり子を与えるほどにあなたは愛されていたわけですから、今のあなたは間違いなく神に愛されております。あなたが神を愛さなくてもです。あなたが今日聖書を1回も開かなかった、不敬虔な祈ることすら忘れた、食前の祈りすら忘れた、そんなあなたも神は愛して下さいしております。いつでも十字架の足元に戻るならば、私たちはこの神の愛をもう一度確認出来ます。もう一度フレッシュな感覚でこの神の愛を体感出来ます。

11 節をもう一度読みたいと思います。『**愛する者たち。神がこれほどまでに私たちに愛して下さったのなら、私た**

ちもまた互いに愛し合うべきです。』これほどまで、どれほどまでか皆さんはご存知だと思います。分かっていると思います。罪が全くない方が、あなたのすべての罪を、すべての罪です。漏れなくです。あの罪も、この罪もです。全部十字架の上で負って下さいました。イエスがどんなに恐ろしいひどい目にあっただのか。十字架刑がどれほどおぞましいものなのか。思い描いて欲しいと思います。それが罪の成すことです。それが、本来あなたが経験しなければならなかったことです。あなたが罰せられるべきところを、あなたが苦しむべきところを、あなたがのろわれるべきところを、あなたが辱めを受けるべきところを、すべて罪のないイエス・キリストが代わりに負って下さった。これほどまでにあなたは愛されております。今あなたは理不尽な目に遭っているでしょうか。イエスはそれ以上に理不尽な目に遭いました。今あなたはいろいろな苦痛を覚えているでしょうか。イエスはあなた以上の苦痛をあなたのために耐え忍んで下さいました。逃げることも出来たのです。逃れることも出来たのです。十字架から降りることも出来ました。でも敢えてそれをしなかったんです。それはあなたのすべての罪を贖うためです。最後の最後まであなたを愛し抜くためです。あなたを永遠の滅びから永遠の命へ至らせるためです。イエスの愛は永遠の愛です。あなたを愛さなかった瞬間は、一瞬たりともありません。十字架の上ですらあなたのことを思っていました。「父よ、彼らをお赦し下さい。」そして今もイエスはあなたのことを愛し続けておられますし、赦し続けておられます。今心の中で、あなたの心の中で「あの人だけは許せない。ムカついている人がいます。腹立たしく思っている人がいます。苦々しく思っている人がいます。恨んでいる人がいます。本当に憎らしい人がいます。付き合いたくない人がいます。」もし、そうした人たちがあなたの心の中に思い浮かんだならば、この言葉を思い出して下さい。第一ヨハネ 4:11 に、『愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。』神がこれほどまでにあなたを愛してくださったのであれば、または愛してくださっているからには、私たちもまた互いに愛し合うべきです。私たちもあの人を愛し、あの人を赦すべきです。あの人を受け入れるべきです。なぜならばあなたはこれほどまでに神から愛されているからです。あの苦々しく思っている人、あの憎らしく思っている人、腹が立って腹が立って仕方がないと思っている人、口も効きたくないと思っている人、その人をあなたは愛すべきです。その人をあなたは赦すべきです。なぜならばあなたは、信じ難い驚くべき愛をもって愛されているからです。人知を遥かに超えたこれ以上ない愛をもって愛されているからです。C. S. ルイスという人はこういう言葉を残しました。C. S. ルイスの言葉です。「クリスチャンであるとは、許し難い人々を赦すことである。」素晴らしい定義です。クリスチャンの特徴を言っています。「クリスチャンであるとは、許し難い人々を赦すことである。神があなたのうちにある許し難いものを赦してくださったからである。」至極もつともです。神が私のうちにある許し難いものを赦して下さいましたから私たちは他者を赦すべきです。あの人を受け入れるべきです。あの人を愛すべきです。あなたは神に愛される資格など全くなかったはずで、私のような罪深い救い難い者が、御子の命によって救われたんです。私が救われたのであれば、私が神に愛されているのであれば、すべての人は救われるはずだ。すべての人は神に愛されているはずだと私は思います。この愛を知ってから私は人を恨むことはもうなくなりました。勿論時に腹を立ててムカついて殴りたくなるような思いもあります。でも絶対に許さないとか、一生恨んでやるとか、何とかして復讐してやるという、そういう束縛から解放されました。いつまでも怒り続ける、いつまでも恨み続ける、いつまでも苦々しい思いを持ち続ける。そういう古い性質から解放されました。この神の愛を知ってから解放されたんです。「クリスチャンであるとは、許し難い人々を赦すことである。」アーメンと私は今心からそう言えます。勿論それが私の力で出来ないということを知っています。でも十字架の足元に私が進むならば、そこに戻るならば、それは可能になります。「わたしを離れてはあなたがたは何もすることは出来ない。」とイエスは言いました。十字架の足元から離れば、私は人を絶対に許せないと思います。危害を加えた者、損害を与えた者、私を傷つけた者、私を侮辱した者を、きっと私は絶対に許せないと思いますし、100 倍にして返してやろうなんていう不遜な思いを持つと思います。でも、もう一度十字架に戻るならば、それは全く愚かしい、全くつまらない、全く罪深い考え方であって、私のような者が赦されたのであれば、この人も赦されるべきである。この人の罪はすべて十字架で負われて、神の目にはこの人は愛されている存在である。

12 節 13 節を見て下さい。『¹²いまだかつて、だれも神を見た者はありません。(神を見たら全員死にます。罪人は

聖なる神の前に立ち得ないからです。旧約聖書の中で「神を見た」というような表現はありますけれども、それはあくまで神の栄光のかけらを見たような、栄光の影を見たような状態です。実際に顔と顔を合わせて見るということは、それはもし実現したとするならば、その人はもう生きておりません。いまだかつて、だれも神を見た者はありません。たとえモーセのような親しい神との関係を持っていたとしてもです。)もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。¹³ 神は私たちに御霊を与えてくださいました。それによって、私たちが神のうちにおり、神も私たちのうちにおられることがわかります。』私たちは、神が愛であるという方、愛が神の本質である、神の属性である、神の性質であるということは分かりました。そしてその神の愛をもって私たちが互いに愛し合うならば、その神の臨在が愛し合う時に顕著に現れるということがここに書かれています。神の愛によって私たちは互いに愛し合うことが出来ます。人の愛ではありません。あなたの愛ではありません。あなたが絞り出す愛ではないです。努力する愛ではありません。これは神の愛です。それをもって愛し合う時に、神が確かにおられるということが分かります。神の存在がもっともハッキリ分かる時、それは私たちが神の愛をもって互いに愛し合う時です。「ああ本当に神はいるんだ。ここに神がおられる。」実感出来ます、肌で感じられます。今読んだところに『**神は私たちに御霊を与えてくださいました。**』とありますが、御霊の実は愛とされています。ガラテヤ 5 章に書いてあります。御霊の実は愛ですから、当然神の愛が御霊によって結ばれていくことで、やはり実感出来るわけです。

そして 14 節。『¹⁴ 私たちは、御父が御子を世の救い主として遣わされたのを見て、今そのあかしをしています。¹⁵ だれでも、イエスを神の御子と告白するなら、神はその人のうちにおられ、その人も神のうちにいます。』今読んだ中にたくさん“うちに”という言葉を見ました。12 節以降に特によく見られます。神は私たちのうちに。神の愛が私たちのうちに。この“うちに”、英語で言えば“in”という言葉です。これがずっと繰り返し繰り返ししつこいほどに使われております。神の愛が私たちのうちに。神のご臨在が、キリストの御霊を、聖霊がキリストの御霊として私たちのうちにキリストが住まわれていることを、神がおられるということを実感させてくれるわけです。互いにこの神の愛をもって愛し合う時に、うちに神の実在性を私たちは体験出来るわけです。『**だれでも、イエスを神の御子と告白するなら。**』これは 2 節と比較して頂きたいと思います。人となってきたイエス・キリスト。イエス・キリストの人性、100%イエスは人間であったということ。そして 15 節では、イエスは神の御子、イエスは神であった。イエスの神性、100%イエスは神であったことを。その両方を告白する者、認める者、信じる者、それは神から出た者です。その者は神の愛をそのうちに称えているものです。その者は神の臨在を実感出来る者たちであります。

16 節 17 節。『¹⁶ 私たちは、私たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。(よく神は愛ですという言葉が使われますが、ここからも来ています。神は愛です。)愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおられます。¹⁷ このことによって、愛が私たちにおいても完全なものとなりました。それは私たちが、さばきの日にも大胆さを持つことができるためです。なぜなら、私たちもこの世にあってキリストと同じような者であるからです。』私たちが互いに愛し合うことによって、私たちは神から出た者である。すなわち救われた者、クリスチャンであって、もう私たちは自分の罪のうちに死ぬことがない。罪の罰を受けることはない。永遠の滅びは私たちには定められていない。神の怒りには定められていないということを知って大胆になります。恐れや不安から、思い煩いからも解放されます。キリストと同じような者、全くこれまで罪を犯したことの無いような者として義と認められるからです。だから私たちは大胆に神の恵みの御座に進むことが出来ます。キリスト・イエスにある者は、罪に定められないことを私たちは確信出来ます。勿論だからと言って、どんな罪でもごめんなさいすれば赦されるからやりたい放題と。そうなればグノーシス主義だということ覚えて下さい。そうではありません。これほどまでに神に愛されているのであれば、私たちは罪など犯したくないと思います。逆にイエス・キリストのように自分を犠牲にしても人を愛したくなります。すべてを与えたいと思うようになります。これまでは人から受けることばかり考えていました。見返りばかり求めていました。自分が愛すれば、それなりの見返りをもらうこと。そして見返りが得られなくなれば、もうその愛をとめてしまう。愛することをやめてしまう。それがかつての私たちの姿だったかもしれません。それが人間の愛であります。でも神の愛は見返りは求めません。条件もつけません。愛しにくい人でも、愛し難い者でも、救われ難いおぞましい罪深い者でも、神

の愛は無条件で注がれます。苦手なタイプの人、馬が合わない人、そういう人でも私たちは愛することができます。ですから、もう私たちは弱気にはなりません。大胆になります。

18 節。『愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。』全き愛、完全な愛、パーフェクトな愛ということです。それには恐れがないと。恐れと言ってもいろんな恐れがあるわけです。私は高い所を恐れています、高所恐怖症とか。狭い所は怖いです、狭所恐怖症とか。そういう恐怖症がないという話ではありません。所謂自然の恐れがないという意味ではありません。そうではなくて、ここで言う恐れというのは、刑罰という言葉が使われているので、その言葉が示唆しているように、刑罰は恐れが伴います。自分は神に愛されていないのではないかとか。自分は神から見捨てられたのではないかとか。自分は救いを失ってしまったのではないかとか。このまま地獄に落ちてしまう、天国には行けないんじゃないか。恐ろしいです。怖いです。不安です。でも、全き愛はそれらのネガティブな思いを全て締め出します。もう恐れる必要はありません。大胆に神の恵みの御座に告白に近づくことができます。イエス・キリストを神として、人としてを信じる者たちは皆、どれほど神が自分のことを愛しておられるのかを知る者であって、すべての罪は完全に御子が十字架の上で贖って下さった。ご自分の命の代価をもってすべての罪を贖って下さったことを知っている者たちですので、もう恐れなくなります。なだめの供え物としてイエス・キリストは神のすべての怒りをその身に負って下さいました。私たちの受けるべき聖なる義なる神の怒りを、義憤なるものを、私たちは負わずに済んだのです。ですからもう怖いものなしです。刑罰を受けることは決してありません。また救いを失うということも決してありません。恐れがあるところには、愛がありません。恐れがある時に、そこには愛がないということも知って下さい。愛には、恐れがありません。でも恐れる時には、そこには愛がないんです。恐れる時を今皆さん想像してみてください。どういう時にあなたは恐れるでしょうか。クリスチャンであれば、もう救いを失わない、刑罰を受けない、地獄に落ちない。それは分かっているのに、そういう恐怖は抱かないと思います。でも、クリスチャンでも恐ろしくなってしまうことがあります。それは狭所恐怖症とか、高所恐怖症とか、そういった類のものではありません。そうではなくて、「もしかしたら自分はこれですべてを失って、そして不幸な人生を歩むようになってしまうかもしれない。もしかしたら私の身に災が降りかかってくるかもしれない。そうなったらどうしよう。怖いです。」そのような漠然とした恐れです。でもそういう時には間違いなくあなたは神の愛の内にはとどまっております。もしあなたが神の愛を、全き愛を、完璧な愛を本当に知って、本当に味わっているならば、恐れは閉め出されます。具体的にはどういうことが起こってくるかと言いますと、何があっても神は愛ですから、この私に悪いことは絶対になさらない。たとえ人の目に悪いと思えることでも、否定的なことでも、破壊的なことでも、神は私のことをこれほどまでに愛して下さいから、だから災が降りかかったとしても、神は私にベストを尽くして下さい。最善をなして下さい。そのように神の愛を信じている者たちは、恐れることはありません。大胆になります。確信を持てるわけです。何があっても揺るがない。大地震があっても、大津波があっても、揺るがないのです。「神は愛です。この私は愛されている。だから何があっても、どんなに厳しい現実にも直面することがあったとしても、大切なものを失ったとしても、それでも神は私を愛して止まないお方。絶対に私にとって一番のことを、ベストのことをして下さい。それはすぐには理解出来ないかもしれない。それでも信じます。神は私のことを本当に愛して下さい。」そう信じている者は、恐れることはありません。ですから恐れている時は、確実にあなたは神の愛を疑っている時だと思って下さい。これはクリスチャンにおいても、私においても起こり得ることです。私も恐れます。恐れている時は、間違いなく私は神の愛を疑っております。聖書の言葉を、約束の言葉を疑っております。そういう時は恐れます。恐れを克服する秘訣は、この神の全き愛、パーフェクトな愛、欠けることがない愛、絶対に何があっても移り変わったり、とどめられてしまうことのない永遠の愛です。その愛のうちにとどまること、その愛のうちに浸ること。それが恐れを克服する唯一の手立てであります。「私は怖がりなんです。すぐにびびってしまうんです。すぐに不安に陥ります。」これは恐怖症にも適用出来ると思います。高い所でも神の愛を信じて下さい。そしたら高所恐怖症のあなたも大丈夫です。「私は対人恐怖症なんです。人混みが苦手なんです。大勢のところは苦手なんです。」そういう人もいます。私もそうです。東京では暮らしていけません。満員電車では3カ月もたないと思います。

ですが、神は愛です。本当に私は神に愛されている。そのことを覚えるならば、ありとあらゆる恐怖心を私は克服出来ると思います。今までも神の愛を信じることで沢山の恐れから解放されてきました。本当に疑い深い者です。本当に私も弱い者です。でもその都度十字架の足元に戻ることが許されて、その都度神の愛をもう一度刷新されるような思いで、もう一度思い起こさせて頂くような形でリフレッシュされて、リマインドされて、そして疑っていたことを告白して主の赦しを乞い、そして再び神の愛に浸ること、神の愛のうちに歩むということが叶うようにされました。そのことで沢山の恐怖を克服してくることが出来ました。

時にバイブルスタディーに来ていても、家で聖書を開いて御言葉を読んでいる時でも、あなたは恐れることがあります。聖書の言葉によって逆に怖がってしまうこともあるわけです。そういう時もあなたは神の愛をもって、愛を通して聖書を読んでいるかどうか吟味してみてください。神の愛のレンズを通して愛言葉を紐解かなければ、神の愛をもってバイブルスタディーに臨まなければ、そこで聞く言葉はもしかしたらあなたを崖から突き落とすような恐ろしい言葉に聞こえてしまうかもしれません。もしかしたらそこで目にする聖書の御言葉は、あなたを凍りつかせるような言葉になってしまうかもしれません。でもそういう時にもう一度神の愛に立ち返ってみてください。神の愛のレンズを通して、愛のフィルターを通して聞いてみてください、読んでみてください。そうすることであなたのうちにあった恐怖は完全に閉め出されます。「御言葉を読むと、教会に行くと牧師の話を聞くと、私は恐怖に襲われるんです。何と恐ろしいことを。」そういう時に限ってあなたは神の愛のうちに自らの身を置いていないということを、そのことに気付くはずであります。「確かにそうだった。怖いと思った時、私は神の愛のうちに浸っていなかった。恐怖心を抱いた時、確かに私は神の愛を疑っていた。だから怖かったんだ。だから恐怖に駆られてしまったんだ。」ということに気付くはずであります。全き愛は恐れを締め出します。私たちはもう恐れる必要はありません。キリストの愛があなたを取り囲んでいます。**第二コリント 5:14**。キリストの愛があなたを取り囲んでいるんです。この“**取り囲む**”ということは、差し迫ってきてあなたをまさに締め付けるような勢いで囲まれているというイメージの言葉です。愛がどんどん迫ってくるので、もう恐れがあなたの心のうちにはびこる余地がなくなるほど、もう愛が差し迫ってくるんです。怒涛の如く、大波の如く愛があなたに押し寄せて来るんです。すべてを洗い流します。すべてを遠くに追いやってしまいます。それほどまでにあなたは愛されています。

最後に **19～21 節**までお読みしたいと思います。『¹⁹ **私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださいからです。**（あなたが背を向けていても、あなたが神を愛さなくても、神は真っ先にあなたを愛してくれます。あなたよりも先に神の方からアプローチして下さいます。神がイニシアティブをとってくださるのです。神の愛は常に私たちより先に進みます。先行していくんです。神がイニシエーターです。日本語で言えば“発起人”という言葉でも良いかもしれませんが。私たちはイニシアティブをとるのではなくて、私たちはただ神のそのイニシアティブに対して、その先に行くアプローチに対して応答するだけです。神がまず私たちを愛してくださいからならば、私たちは神に私たちを愛させていくということが肝要であります。変な言い方かもしれませんが、もっとあなたを神に愛させる。神はあなたを愛したくて愛したくてたまらないのです。あなたの愛を神はただ待っているではありません。神をどんどんイニシアティブをとって、あなたをじゃんじゃん愛したいのです。怒涛の如く愛の波を送りたいんです。愛のシャワーをあなたに浴びせたいわけです。ですからあなたはそれに逆らわず神の愛を受けて欲しいと思います。神に自分自身を愛させて欲しいと思います。神の本質は愛なのです。神は愛をやめることが出来ないのです。愛したくてたまらないのが神様であります。ですから私たちはまず神に愛して頂き、その愛をもって、受け取って、味わって、そして互いに愛し合うべきであります。その愛をもって勿論私たちは神を愛することも出来ます。)²⁰ **神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。**²¹ **神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。』**確かにキリストから受けています。ヨハネの福音書 13 章 34 節のところに「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。」と。新しいと言っても本当は古いのです。「**わたしがあなたがたを愛したように**」イエス・キリストが私たちを愛してくださっている。「**あなたがたも互いに愛し合いなさい。**」キリストがこの私を愛したように、私もあなたを愛します。命令として

受けています。神を愛するというのは、口では何とでも言えます。賛美の歌詞にもそういう言葉が沢山出てきます。主を愛しますとか。いくらでも口先三寸でも、口八丁でも、何とでも私たちは「神を愛しています。」と言えます。「クリスチャンですから神を愛しています。」といくらでも言えます。でも本当に神を愛しているかどうか、それを測るバロメーターというものがあります。それが兄弟姉妹を愛することによって測られると、ここに書いてあるわけです。神を愛する者は、神の子どもを、神の息子を、神の娘を、神の家族を愛するわけです。神の家族を、クリスチャンを愛さない者は、神を愛していない者です。これも単純な見分け方です。クリスチャンを愛していない者は、クリスチャンかどうか分かりません。クリスチャンは、神から出た者と呼ばれるクリスチャンを、兄弟を、姉妹を必ず愛するようになります。神を愛していればこそ、私たちは神の命令を至上命令として、他のどんな大切なことも、優先順位もすべて神の命令を至上命令として、常に神を愛し、隣人を自分自身のように愛する。昔から言われている大切な御言葉です。それをイエスが改めて言い直しました。「わたしがあなたがたを愛したように、わたしがあなたがたのために十字架にかかって死んだように、わたしがあなたがたのすべての罪を赦したように、あなたがたも自己犠牲の愛をもって、見返りを求めない愛をもって、無条件の愛をもって愛しなさい。」と。

マザーテレサは「愛とは他人の心の痛みに傷つく心だ。」と言いました。そしてまた「痛みを感じるまで愛しなさい。痛みを超えるまで愛しなさい。」と言いました。これがキリストの愛です。十字架の愛を言い表しております。私たちはどちらかと言いますと、愛する対象を自分で決めてしまいます。愛しやすいタイプの人。気心が知れている人。自分の好みや自分の望みにかなう時に、私たちは愛そうとします。でも好みでなかったらどうでしょうか。自分の望みにかなわない、タイプではなかったらどうでしょうか。愛することをしませんが、でも十字架の愛を思っていて欲しいと思います。十字架の愛の対象は、何も愛しやすい人たちばかりではありません。愛しにくい人たち。否、愛される資格のない人たち。イエス・キリストを傷つけ、罪の無い方を平気で罪人呼ばわりして、理不尽な扱いをして、そして文字通り肉体的にも精神的にも虐待を加える。そういう人たちも愛の対象なのです。人をあざけて、人を罵って、つばきをかけるような人たちも愛の対象なのです。人が苦しむ姿を見て平気でギャンブルに興じられるような人たちも愛の対象なのです。ですからクリスチャンは、許しがたい人たちを赦す人たちなのです。なぜならばクリスチャンは、自分の中にある許し難いものをこの神に赦して頂いたからです。私たちはなかなか感情を伴うようにして人を愛することは出来ません。「愛する気になれない。赦したいという気持ちになれない。だから愛せないのです。だから赦さないんです。」ということと言います。でもそれは必要ないことです。それを言い訳にもしてはいけません。むしろ私たちは、人を愛するというのを、または人を赦すということを決める、心で決める、決断する。そのような選択をするということです。それが求められていることです。必ずしも感情の部分、フィーリングの部分にそれに伴っていなければいけないと言っているわけではありません。「赦す気にもなれない。愛する気にもなれない。でも私は愛します。そう決めます。愛することを選びます。赦すことを選択します。その決断、その決意、心で決めること、意思の部分。それがここで問われていることです。互いに愛し合いなさい。この命令にフィーリングは不要であります。でも、もしあなたが心で決めるならば、もしあなたが愛することを、赦すことを選ぶならば、決意するならば、不思議なことが起こります。感情もいつの間にかそこに伴って来るんです。「絶対にこんな人は愛さない。愛する気にもなれない。」でも愛すると決めた途端に、何かこれまで愛し難いと思っていたその相手のうちに愛らしいものを見たり「こんなに良いところがあったとか。こんなに素晴らしいところがあったのか。こんなに優しいところがあったのか。」そして「こんなにこの人は弱い人だったんだ。本当にこの人は実のところ悲しい人だった。こんなに辛い思いをして、こんなに傷ついて。」憐れみの思いを抱くようになります。同情を抱くようになります、同情心を。そのようにしていつの間にか感情も後から伴ってくるということも覚えて欲しいと思います。最初から感情が必要なわけではありません。それも何もかもまずはあなたが神の愛を受けることから始まります。まず神の愛を経験してみてください。経験しなければいけません。もっと深く神の愛を味わう必要があります。神の愛は無限大、無尽蔵です。尽きることはありません。

人間の愛は儂いもので、絞り出そうにも絞り出てこない。愛したくても愛せない。感情が全く伴って来ない、出て来ないのです。もう疲れてしまうのです。愛する気にもなれなくなってしまいます。愛情が全く消えてなくなってしま

うのです。

しかし神の愛は永遠の愛です。全き愛です。恐れることはありません。「裏切られたらどうしよう。傷つけられたらどうしよう。逆ギレされたらどうしよう。」そんな恐れは抱きません。神はあなたのことを愛して止みませんから、傷ついたあなたを確実に包み込み癒してくれます。つまずいたあなたを必ず立たせてくれます。弱り果てたあなたを必ず強めてくれます。絶望的なあなたに、必ず希望を与えてくれます。この世が与えるものとは全く違う平安をもってあなたを支えてくれます。あなたは独りではありません。神が共にいて、そしてあなたが愛する決意をした時、神があなたと一緒にいてその人を愛される姿をあなたは目の当たりにします。イエス・キリストがその人の罪のために死んで下さったその姿をあなたは目の当たりにします。それによってあなたはもう「絶対に許せない。」なんていう思いから解放されます。

今日は時間が来てしまったのでこれで終わりたいと思いますけれども、次回 **5 章**、また楽しみにして頂いて、私たちが今テーマとしているのは、神を経験するという、体験するという事です。机上の空論ではありません。ここに書かれていることをあなたは実践出来ます。実践することで書かれている通りのことをあなたは個人的に体験出来るんです。神は愛です。ただの神学ではありません。ただの哲学ではないのです。気休めでも何でもありません。神の愛をあなたは今も、この瞬間も経験出来ます。特に、愛しにくい人が目の前に現れた時、あなたを攻撃するような、あなたを馬鹿にするような、あなたをどん底に突き落とすような、全く自分の力ではもうこの人との関係をどうにも出来ない、どうにもならない、とても愛せない。そういう時に、どこからとなく神の愛が湧いて出てきます。その時に知ります。神は生きておられる。神は愛です。そしてますますあなたはこの神の愛をその身に帯びて、愛のうちを歩むことがこんなに素晴らしいことかと、人を愛することをやめられなくなります。愛するということはそんなに難しいことではありません。あなたが愛されているという事実さえ分かれば、あなたが愛を受けていることさえ分かれば、そんなに難しいことではありません。誰かを愛するということは、その人に幸福になってもらいたいと願うことであります。あなたは、相手に幸福になってもらいたいと願うでしょうか。その時点で既に神の愛は働きます。この言葉は、トマス・アクイナスという有名な神学者が言った言葉です。「**誰かを愛するとは、その人に幸福になってもらいたいと願うことです。**」ですから、愛するという言葉があまりしっくり来なければ、人を好きになるということと混同してしまっているのであれば、分かりやすく「この人には幸せになってもらいたい。」それが愛するということです。「この人に祝福の人生を送ってもらいたい。」そう願うことが、その人を愛するということです。好きになれない人に愛するなんていうことを言われても、なかなかしっくり来ないかもしれませんが、「嫌いですがけれども、苦手ですがけれども、でもこの人には幸せになってもらいたい。」そうしていくうちに感情もフィーリングも伴ってきます。イエス・キリストは、あなたにも幸せになってもらいたい。だからこのことを私たちに語っているんです。人を憎むうちは幸せにはなれません。苦々しい思いを抱いているうちは、許せない気持ちを抱いているうちは、絶対にあなたは幸せにはなれません。幸せは、人を愛する時に実感出来るものです。愛する時にあなたは神を実感するからです。幸福の源である神は、愛し合う時にその姿を最も顕著に現わして下さる。このことが**ヨハネの手紙第一の 4 章**に書かれておりました。では、これで終わりたいと思います。